

は「三瀧<sup>みづま</sup>県佐賀郡」となり、同年九月には「長崎県佐賀郡」と変更された。これが明治十六年七月に「佐賀県佐賀郡」と変り、同十七年には各村に戸長が置かれ戸長役場ができ、同二十二年三月二十三日に町村制が施行された。この町村制の施行に伴って、下古賀村・田中村・飯盛村の三村が合併し、初めて「佐賀県佐賀郡東与賀村」の現在の村名が誕生し、その初代村長として古賀助作（大野）が選出され就任したのである。

以上のような地理的・歴史的な経過をたどって現在のような各村落が形成され、そして年々歳々と発展し繁栄しつつ今日に至ったのである。

## 一 立 野

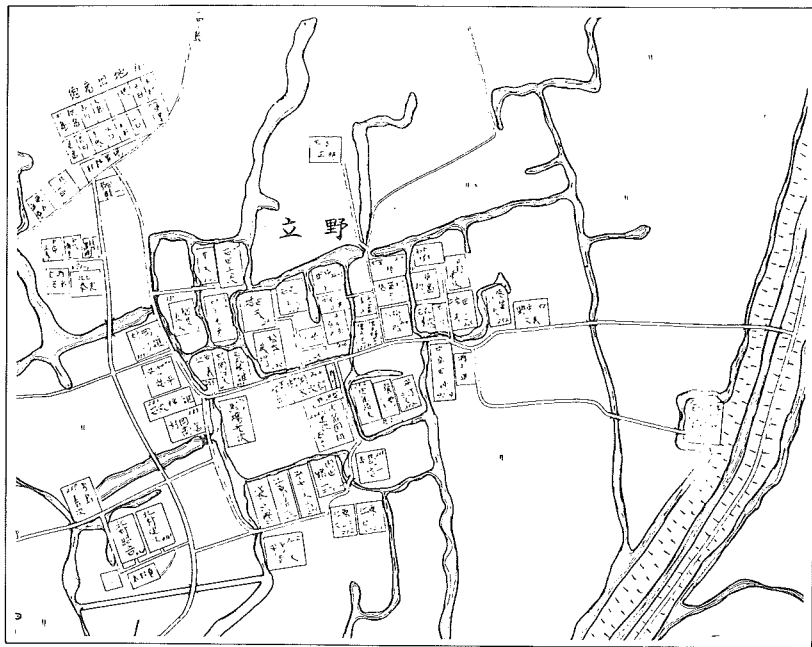
立野は東与賀町では東北の端に位置し、東は八田江を隔てて川副町に、北は佐賀市本庄町に境をしている。貞享年中（一六八七）の郷村一覽には、立野村の小字に「新ヶ江」が記載されているので、少なくとも四百年前にこの村はできていたであろうと思われる。立野—という村落名はどうして生まれたかは明瞭でないが、山口恵一郎の「地名を考える」の説によると「湿性」を表す語として、「野」や「沼」が極めて多いとのことである。この村落も湿地帯即ち干拓により生まれた地名と考えられる。また「野っ原に家が立った」とか、「野の中にしっかりしたものを立てる」等とも想像されるのである。

現在の世帯数は合計八六で町内でも大きい村落に数えられ、農業二六、建設業二〇、運輸通信七、公務員と卸小売業がそれぞれ六、その他無職等の職業種別である。この北西部の徳富団地の新住宅は、昭和四十九年から出

来たもので、末次く中島線の道路が昭和三十年に完成し、昭和四十一年には中島く立野線が落成開通した。更に立野より船津への道路も完成して、東与賀東部の村落と佐賀市周辺との交通運輸の便は非常によくたった。

この集落の特徴は、本県における「水田酪農」の開祖ともいえるべく、その創始者はこの村出身の故袋正美と下飯盛の故淵田儀一などである。この二人は昭和初期における佐賀県酪農揺らん時代を形成しており、その業績について「佐賀県酪農二十年史」に詳しく記載されている。酪農の外農家の副業としての<sup>かま</sup>織りが盛んであった。これは終戦後の昭和二十三年頃から急激に高まり、三十八年頃が最盛を極めた。当時の村長故山田八郎、農協専務増田嘉一や中割の吉村竹次等の指導督励もあって、その生産高は年間三〇万枚に達し、

立野の家屋分布と環濠の状況



当時村の副業収入は倍加した。その基礎を固めたのはこの立野であり、現在江原清二は年産量六〇〇枚という吠織り名人の特技保持者である。彼等が中心となって立野および東与賀の吠織りを推進し発展させたのであった。この村の東部八田江の濁流に浴つて古刹の長泉寺があるが、その創立は寛永五年（一六二八）とあるので、既に三百五・六十年を経過している。現在も坂田小路とか六蔵小路の名称が残っており、井戸掘りの際には必ず牡蠣がらが出てくるので、昔こら辺りは海岸だったことが証明される。

前頁の地図は現在立野の家屋の分布状況である。この地区は東与賀町内でも最も地面が低い上に、八田江の堤防にさえぎられて、集中豪雨ともなれば、全村の水量が集まる。したがって縦横の堀―クリークがあつて、いわゆる環濠集落の典型的なものである。

#### 立野「龍王宮」

この龍王宮は、立野地区のほぼ中央部に位置して祀られてある。元は佐賀市本庄町中島との境界にあつたものを、大正三年に現在地へ移転して遷座したのである。龍王宮の左柱に「干時延宝弟八蔵〇〇中三月〇施主、古閑権之助信重、宮司長泉寺銀昌」―と刻まれており、右柱には肥前国佐賀郡与賀郷立野村古閑氏が奉納したことを示してある。今から約三〇〇年前に建立されたものである。

境内に「手水鉢」がある。その石台に「元禄元年戊辰霜月十八日、奉彫建石燈籠二基、八大龍王御宝前」―と刻字もはつきりしている。これは約二百九十年前に寄進されたものである。更にお宮の裏側には「大石」があつて「寛文六年、青面金剛一月」―の銘があり約三百二十年前のものである。また北側の山頂には「文化十五年袋文

左工門、増田嘉兵衛、篠原浅右工門奉納」の石像もある。

佐賀市本庄町中島との境界にあつた「天神社」を、明治四十年の政令によりこの龍王宮に宮寄せをした。以前から毎年十月十八日には龍王祭りと天神祭りを盛大に挙行したが、戦後の中の天神祭りは農地改革により免田を手放したので経費に支障を来した。しかし今日まで大祭りと小祭りの二つに分かれて、番帳を順番に廻して継続実施している。

一番思い出の深いのは龍王宮と天神社の大前で盛観を極めた夏祇園である。この祇園祭には男子が成人して青年団に入団すれば、一個の大提灯を神前に献燈するという掟があつた。その大提灯には牡丹に唐獅子が画かれており、これに火を灯すと勇壮華麗な絵が浮き出て、将来の出世と活躍を表明するわけである。参道には出店が並び子供心を誘う大小さまざまな凧（とうばた）やおもちや、それに氷店や菓子店等が所せましと陳列された。

境内には数日前から舞台作りがなされ、昔の白やばんこと共に真産まぶやむしろも敷かれて、にわかには野外劇場が完成するのである。踊りのけい古もその一カ月前からの練習で、以前は男に限られていたが、後には女子青年等も加わり中老の男女が競つて毎晩楽しんでやった。しかし昼の農作業の後でのけい古であるだけに相当の苦勞もあつたが、お祝儀を戴いたり拍手を浴びるとまた喜びもひとしおであつた。

立野の男子青年は古来自己の家庭には寝ずに、数名ずつ集まつて他人の家に宿泊するという習慣があつた。その宿泊する家のことを「青年宿」と呼ばれ、現在の徳富春雄・野中十郎・増田政一等の住宅がよくあてられたそうである。毎日の風呂も昔からもやい風呂で、隣り近所の四・五軒が一緒になり、しかも男女混浴の姿であつた。夕方から夜半にかけて二十数名から三〇名位の人々が入浴を楽しんだ。使用する水はほとんど堀水をバケツで汲

み入れ、燃料は主に石炭をたいだ。今日では各自宅での入浴であるが、当時月を仰ぎ虫の鳴く声を聞いた野風呂の情緒と景観はなつかしいものである。

この河川にちなんで川神祭りの行事がある。毎年五月に立野と中島地区の境界の場所、昔の「ひゃあらんさん」この広場に菟うさぎを敷き、弁当やご馳走を持ち寄ってお祭りする。その趣旨は川の水に対する感謝と水難予防である。この堀水に関連して毎年二月には「寒の水」の習俗がある。これは正月に搗ういた餅を寒の水につけておくと一年中腐らないというのである。寒の水を大瓶の中に蓄えこれにつけた餅は、昔から馬耕やごみ揚げや子供たちのおやつとしての「黄粉餅—きなこ餅—」となる。この味はまた農村では欠くことのできない風味と栄養満点の食品でもある。

この立野には毎年の正月行事として、「百手」があるが詳しくは民族編に記載している。

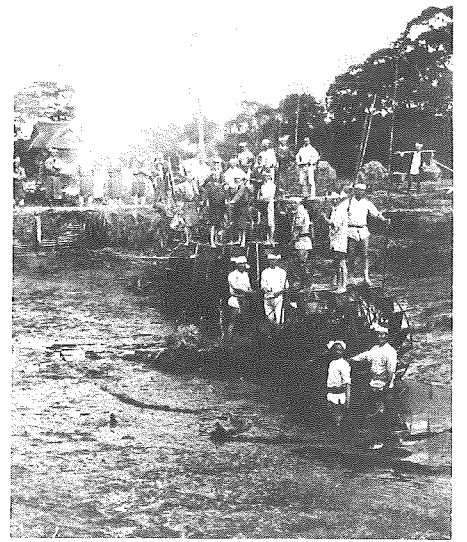
## 二 実 久

実久は本町の東北部に位置し、北は堀を隔てて佐賀市本庄町と境し、東は立野、西は鍛冶屋、南は上町に相接している。正保絵図に「実久」の村名が見えるが、有明海の干潟が干拓へ移行していった鎌倉時代の海岸地帯とみられている。万延元年の郷村帳には実久村の小字に「鍛冶屋・上町・島の内」が見える。

現在の戸数は四十三戸で昔は農家が大部分を占めたが、今日では農業九、サービス業八、建設業六、製造業五、その他無職や運輸通信、公務員等各種各様の産業に励んでいる。

実久の地名について地元の人々の伝承によれば「実久の郷」——よりきており、その郷主は故山口元助である。この山口元助は当時石高切米五石五斗の鉄砲足軽で、その大組頭は鍋島主水であった。その頃この村落の東の隅に「郷倉」があつて、藩政時代から粃もみを貯蔵していた。一面「実久津」——の名称も残っていて、昔は海岸線か河川に近く、粃や穀類を船で積み出す場所だったことも考えられる。現に「喜十屋敷」の名も残っているが、これは故平方喜十の屋敷のあとで、その頃、領中で十五石の組頭であつたという。今回の水田圃場整備事業の際、この喜十屋敷の跡から数個の遺体や位はい等も掘り出されたそうである。その他、なまず屋敷とか田中屋敷等の旧地名が残っており、田中屋敷には墓地が現存している。

この実久は他の村落に比べて土地としては狭い方であるが、龍水院と円通寺の二カ寺があり、すでに廃寺となつた威徳寺と潮音寺があり、四つの寺院が連立していた。このことは実久が東与賀村発祥の地として人口も多く戸数も多かったのではないかと推定される。実は本庄町鹿の子八幡宮から御神体の一つを分けて、東与賀町船津八幡宮へ移した時の絵巻物が、この集落の旧家村岡道栄宅に保存されている。それらと考え合わせるとこの実久は立野や鍛冶屋と共に、東与賀町でも一番早く開拓された土地ではないかと思惟される。ところが鍛冶屋にお



昭和初めの堀干し